

世界の主な言語には屈折語（ラテン語、ドイツ語、英語など、格変化を母音の転移などによってあらわす言語）、膠着語（モンゴル語、朝鮮語、日本語など、名詞の後に接尾辞（助詞）を張りつけて文章をつくる言語）、孤立語（中国語のように活用形がなく、助詞もほとんど使われず、語順と声調によって単語の使われ方をあらわす言語）に大きく分けることができる。しかし、現代の日本人は「脱亜入欧」以来、アジアの言語を顧みることをせず、英語やフランス語だけを文明を伴った言語だと考えるようになってしまったのではなかろうか。

キリシタンの時代

日本にキリスト教が伝えられたのは1549年（天文18年）のことで、イエズス会に属するスペイン人宣教師ザヴィエルによってのことであった。初期の聖書には仏教の用語が転用され、「デウス」にあたることばとして「大日を拝みあれ」と説いたという。大日は真言宗で重要視されている本尊の大日如来である。キリスト教は新しい宗教概念をもったことばであったから、それにあたる日本語を探すのも大へんだった。原語も数多く使われた。

アンジョ（天使）、クルス（十字架）、デウス（神）、オラシヨ（祈祷）、パライズ（天国）、無花果（イチジク）を柿、悪魔を天狗、パンを餅などにあてた。

キリシタン時代のキリスト教は旧教であったから、今でも福音書などの呼び名はラテン系のことばの発音の痕跡が残っている。

マタイ（馬太・Matthew）、マルコ（馬可・Mark）、ルカ（路加・Luke）、ヨハネ（約翰・John）、パウロ（保羅・Paul）、ヤコブ（雅各・James）、ペテロ（彼得・Peter）などである。

キリスト教解禁

日本ではその後長い間キリスト教は禁教とされてきたが、幕末になると何人かの宣教師がやって来るようになる。ヘボン式ローマ字で有名なヘボン（James C. Hepburn）は長老派の医療宣教師であり1859年（安政5年）に来日したが、その前にシンガポールで伝道活動をしていたこともあり、香港、上海を経て来日したので、中国語の知識も豊富であった。しかし、日本では布教活動は禁止されていたので、横浜で診療所を開いて働くかたわら日本語の研究をした。『和英語林集成』（A Japanese and English Dictionary, Trubner & Company）はその成果のひとつである。

柳父章は『翻訳語成立事情』（岩波新書）のなかで、幕末から明治時代にかけて、多くの西洋の概念を漢語に翻訳して取り入れた。「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」は、翻訳のために造られた新造語であり、「自然」「権力」「自由」「彼」などは日本語としての歴史を持ち、日常語のなかに生きていることばで、同時に翻訳語として新しい意味を与えられ

たことばである、としている。その日本式漢語が現代の中国でも多く使われている、としているが、キリスト教の場合は、多くのことばがまず中国語に訳され、それがヘボンなど中国で活動したことのある宣教師によって日本にもたらされた、というのが実情に近いようである。

聖書の日本語

世界のことばのなかで日本語はどのような位置にいちづけられるのであろうか。もう一度、世界のほとんどの言語に翻訳されている聖書の成句で、私たちの母語である日本語と、日本人が一番親しんでいる英語について、中英対照新約全書（1957年）で比較してみることにする。

約翰福音 The Gospel according to St. John

1. 初めにことばがあった。

太初有道、

In the beginning was the Word,

ことばは神と共にあった。

道與上帝同在、

and the Word was with God,

ことばは神であった。

道就是上帝。

and the Word was God.

- 中国語訳では「ことば」のところに「道」と書かれている。はじめに「言（ことば）」があったのだろうか、それとも「道」があったのだろうか。中国語の「道」には往来の道のほかに、①人の守るべき道、②老子の教え、道教、③従う、④云う。言語道断などの道、⑤導くなどの意味があるという。

世界の聖書はギリシャ語を原典として翻訳されているが、ギリシャ語の言語は **logos** であり、その意味は言（ことば）でもあり、道理(**reason**)でもある。「はじめにロゴス（ことば）があった。ロゴスは神とともにあった。ロゴスは神だった」という解釈になる。日本語の古い聖書のひとつである『英和対照 新約全書』（1906年版）には「元始（はじめ）より在（あり）し生命（いのち）の道（ことば）を爾曹（なんじら）に傳（つた）ふ」とある。日本でもはじめは中国語訳にならって「道」とやくしていたが、日本語では「道」は「ことば」という意味にはならないから、「ことば」と変えたのであろう。

- 「上帝」ということばも日本語ではあまりなじみのない言葉である。中国における初期の布教に従事したイエズス会は、中国で古来知られている「上帝」を「カミ」を示すことばとして用いた。中国には天の「上帝」を祭るために天壇があり、冬至の日には皇帝が儀式を営んだ。「上帝」という言葉は儒教の經典にもでてくる。上帝は天の支配者で

ある。中国の皇帝がこの名によって呼ばれてきている。

鈴木範久『聖書の日本語』によると、中国では God の訳語として「神」を採るか、「上帝」を採るかをめぐって激しい対立が生じたという。「神」を主張する側にはアメリカ系の宣教師が、そして「上帝」を主張する側にはイギリス系の宣教師がいた。

キリスト教では God (神) は宇宙を創造し、且支配する全知・全能の主宰者である。それをあらわすのにふさわしい言葉がなかなか見つからなかったのである。「天」も「上帝」も、いずれもキリスト教の「カミ」からすれば被造物である。

2. このことばは、初めに神とともにあった。

這道太初與上帝同在。

The same was in the beginning with God.

3. 万物は神によって成った。

萬物是藉着他造的；

All things were made through him;

成ったもので、ことばによらずに成ったものは何一つなかった。

凡被造的、沒有一樣不是藉着他造的。

and without him was not anything made that was made.

神とは中国では「すぐれたもの」で、一つしかない物ではない。神は見えない物で、スピリットに近い。神は祖先の霊に祈りを捧げるときに用いられる。

「上帝」も「神」も中国語として既成のことばである。だが、キリスト教の「カミ」は、明らかに中国人にとっては新しい「カミ」の観念である。新しい観念を、既成の語を用いて訳そうとすると、どうしても過去から伝統的にそのことばに付着している観念を取り除くことは難しくなる。

カトリックでは伝統的に天主という言葉を使い続けた。儒教に天ということばがある。それは崇高偉大で、無限、絶対、智、仁、勇をあらわすにふさわしい言葉である。天主ということばはこれにあたる言葉である。

日本人にとって「神」とは何であったのだろうか。「神仏」というと「神」は「仏」と対立する概念であった。「神」は「仏」をも含む言葉として使われることもある。それが、ついにはキリスト教の全能神を意味することばになった。

本居宣長にとっての「神」

『古事記』の冒頭は次のような文章ではじまる。

^{アメツチ}「天地初めて^{ヒラ}發けし時、^{たかま}高天の原に成れる神の名は天之御中主神」

本居宣長はこの「神」とは何かについて、『古事記傳』のなかで次のように述べている。

「迦^か微と申す名義は未^{ナノコノロ}ダ思^ミヒ得^トず。さて凡^{カミ}て迦^{イニシヘノミ}微とは、古^フ御^ミ典^ミ等^{ドモ}に見^ミえたる天地の^{モロモロ}諸の神たちを始めて、其^ソを祀^{マツ}れる坐^{ミタマ}ス御^ミ靈^マをも申^トし、又人はさらにも云^{トリケモノ}ず、鳥^{トリ}獸^{ケモノ}草木のたぐひ海山な

ど、其餘何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり。」

たしかに、万葉集には「韓国の 虎とふ神を 生取りに、」(万3885)などとあって、日本では虎も神に祭り上げられている。

キリスト教では「初めにことばがあった」という。そして「万物は神によって成った」という。日本語、中国語、英語の聖書の聖句を比べてみると、神は何故かくも多様なことばをお作りになったのだろうかという思いがしてくる。さらにマタイによる福音書の聖句を比較してみることにする。

馬太福音・The Gospel according to Matthew

9. だから、あなた方はこう祈りなさい。

所以你們禱告、要這樣說：

Pray then like this:

天におられるわたしたちの父よ、

“我們在天上的父、

Our Father who art in heaven,

御名（みな）が崇められますように。

願人都尊你的名為聖。

Hallowed be thy name.

10. 御国（みくに）が来ますように。

願你的國降臨。

Thy kingdom come,

御心（みこころ）が行われますように。

願你的言意行在地上、

Thy will be done,

天におけるように地上でも。

如同行在天上。

On earth as it is in heaven.

11. わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

我們日用的飲食、今日賜給我們。

Give us this day our daily bread.

12. わたしたちの負い目を赦してください。

免我們的債、

And forgive us our debts,

13. わたしたちも自分に負い目のある人を赦しますように。

如同我們免了人的債。

As we also have forgiven our debtors;

わたしたちを誘惑に遭わせず、
不叫我們遇見試探；
And lead us not into temptation,
悪い者から救ってください。
救我們脫離兇惡（或作脫離惡者）。
But deliver us from evil.

神と愛

「神」ともに日本語を変えた言葉に「愛」がある。キリシタンの時代には愛は「大切」とか「御大切」と訳されているという。1600年頃のキリシタン教理書は「万事にこえてデウスをご大切に思ひ奉る事と、我が身を思ふ如くポロシモ（隣人）となる人を大切に思ふ事これなり」とある。これは「神を愛し、隣人を愛しなさい」というマタイ伝の教えをきしたものである。英語の love にあたる適当な言葉がみつからなかったのである。

聖書の原典となっているギリシャ語では「アガペー」は神の人間に対する愛をあらわすことばであり、無限の愛、自己犠牲的愛をあらわすという。これに対して「エロース」は性愛を意味するという。しかし、「愛」は「愛欲」なセックスとも結びつくことばでもあるようである。英語では love といえば情愛のことであるが、make love といえば性交のことである。

白川静の『字通』によれば、「愛は国語では古語の「かなし」にあたり、「かなし」は哀・愛の語義を含む。「万葉」には「可奈之」「可奈思」などの仮名書きのほかは「哀（かなしき）乎」「春菜（わか）採（つ）む児を見るが悲也（かなしき）」「あやに憐（かなし）き」のように哀・悲・憐を用い、愛の用例がない。愛は「愛人（うつくしきひと）」「愛（うるはしき）」「愛妻（うるはしきつま）」「愛（めで）の盛り」「最愛子（まなご）」のように用いる。」とある。

仏教には慈愛ということばもあるが、漢語では「愛」は親が子を愛することであり、子から親へは「孝」、臣から君へは「忠」であった。そして上司に対しては「敬」であった。しかし一方、愛縛といえば、中国語でも性交を意味する。

日本語、中国語、英語の聖書を比べてみると、それぞれの言語の多様性にもかかわらず、聖書の思想や観念をほとんど同じように伝えられるということが不思議に思えてくる。

英語には前置詞、冠詞があるが、中国語や日本語には前置詞も冠詞もない。「はじめにことばがあった」の中国語「太初有道」をそのまま英語に逐語訳すれば "beginning be word" であり、「道與上帝同在」は "word and God same exist" となるであり、「道就是上帝」は "word become this God" となるであろう。それぞれのことば違っていても、違った形において完全である。ひとつとして神のことばを伝えられない言語はない。

新しいものや概念が入ってきたら、借用語を使えばいい。また、「神」や「愛」のような

抽象概念は既存のことばの意味を広げてつかってもいい。慣用でなれてくれば、自然と意味が伝わるようになってくる。「やまとことば」は抽象概念をあらわす語彙が少なかったから、漢語を使って西欧の新しい概念を受け入れた。英語では日常会話を覚えてしまえば、むずかし言葉は大体ラテン語からの借用語だから覚えやすい。Telephone (電話), telegraph (電報), telescope (望遠鏡), telephacy (テレパシー), television (テレビジョン), microscope (顕微鏡), microphone (マイクロフォン) などである。

聖書は世界中の言語に翻訳されて、その福音を伝えている。チャモロ語の聖書も、アイヌ語の聖書も同様であった。その仕組みはどうなっているのだろうか。世界の言語には大きく分けて三つの類型があると言われている。屈折語 (英語など)・孤立語 (中国語など)・膠着語 (日本語、朝鮮語など) についてその構造を比べてみることにする。

日本語と中国語・英語の比較 (○日本語と同じ特徴、●日本語と異なる特徴)

[日本語]	[中国語]	[英語]
【統語】		
○ 語順は主語+目的語+動詞	●	●
○ 否定形は動詞の後にくる	●	●
○ 否定形は名詞の前に置けない	●	●
○ 疑問詞が文の最後にくる	●	●
○ 助詞 (後置詞) を使用する膠着語	●	●
【形態】		
○ 前置詞を使わない。	○	●
○ 冠詞を使わない。	○	●
○ 名詞に単数・複数の区別がない。	○	●
○ 代名詞に格・性の区別がない。	○	●
○ 動詞が活用する。	●	○
○ 動詞に人称標示、単数・複数の区別がない。	○	●
【音韻】		
○ 声調がない	●	○
○ r と l の区別がない。	●	●
○ 開音節である。-p,-t,-k で終わる音節がない。	○	●
○ 複合子音 (sp-, str- など) がない	○	●

言語は歴史的に変化する。古代中国語には l と r の区別はなかったが、日母[nj-]が r に変化したため、l と r の区別が生じた。

また、古代朝鮮語は開音節 (母音で終わる音節) だったと考えられているが、現代朝鮮語には -p, -t, -k で終わる音節がある。

日本語では否定形は動詞の後に置かれて、名詞の前に置かれることはないが、中国語では

「無回答」、英語では“no answer”のように、名詞の前にもおくことができる。

ことばにはさまざまな文法規則があるので、上にあげたのは主な特徴だけだが、言語の類型でみると日本語は英語よりも中国語に近い特徴をもっていることがわかる。いずれにしても、日本語は英語や中国語とは遠い言語だということである。しかし、日本語は決して世界に類を見ない孤立した、特殊な言語であるわけでもない。

日本語と中国語は語順が違うこと、声調があることなど、違う点も多いが、英語に比べたら日本語と中国語は近い点も多い。語彙の面でも人体の名称など、日本語と中国語は基本語彙に同源と思われることばが少なくない。

顔<顔[nɛan]貌[mau] (かほ・かお) >、毛[(h)mô*/mô] (け・モウ)、目[miuk] (め・モク)・眼[nɛan] (め・ガン)、眉[miei] (まゆ・ビ)、耳[miaə*/njia/djia] (みみ・ジ)、口<口[kho]嘴[tsuəi] (くち) >、唇<口[kho]吻[miuət] (くちびる) >、舌[djiat] (した・ゼツ)、牙[nɛa] (は・ガ)、唾<唾[thuai]沫[muat] (つば) >、頸[kieŋ] (くび・ケイ)、脊[tziek] (せ・セキ)、肩[kyat*/kyan] (かた・ケン)、手[tiu*/sjiu] (て・シュ)、爪<爪[tzheu]芽[nɛa] (つめ) >、腋[jyak] (わき・エキ・ヤク)、骨[kuət] (ほね・コツ)、肉[njiuk] (にく)、腕[uat*/uan] (うで・ワン)、肝[kan] (きも・カン)、腹[piuk] (はら・フク)、臍<腹[piuk]臍[dzei] (へそ) >、膝[siet] (ひざ・シツ)、脛[hyeŋ] (はぎ・ケイ)、踵<脚[khiak]踵[tjiong] (かかと) >、体<裸[(h)luai*]体[thyei] (からだ) >、

これらはいずれも、訓は上古中国語音に準拠したものであり、音は唐代の漢字音に対応している。このことは、日本語を話す人々と中国語を話す人々が弥生時代のかなり初期から接触し、あるいは混住していたことを示唆しているのではなだろうか。

日本語・中国語・英語の対象表は煩雑をさけるため、朝鮮語の特徴については比較していないが「世界ことば紀行4・朝鮮語」あるいは「世界ことば紀行5・中国語」との比較表を重ね合わせてみてほしい。嫌韓の人は「何、朝鮮語が日本語の祖先だと？」というかもしれない。「いや、そうではありません。日本語が祖先なのか朝鮮語が祖先なのかは分かりませんが、日本語の構造は朝鮮語にきわめてちかく、共通の祖先から分岐していること間違いないでしょう。しかし、朝鮮語は紀元前2世紀頃から楽浪郡などを通じて、漢語の語彙をたくさん受け入れ、日本語も弥生時代以降古代中国文明の波をうけてたくさん漢語の語彙を受け入れてきました。漢語の語彙は漢字の音ばかりでなく、訓（「やまとことば」と考えられていることば）のなかにもたくさん隠されている。」ということです。

ヨーロッパの言語は、英語も、ドイツ語も、フランス語もそれぞれの土地に根ざした基層語をもっており、その上にギリシャ・ラタン系の語彙が重層をなしている。例えば、英語とフランス語は文法の構造はかなり違うが、語彙はむずかしいことばになればなるほどラテン語系のことばが多く、それぞれ転移はしているものの語源は同じであることが多い。それと同じように、中国語、朝鮮語、日本語は弥生時代以来中国語から取り入れた語彙を共有している。インド・ヨーロッパ語が語彙の共通性によって成り立っているとすれば、中国語、朝

鮮語、日本語も語彙を共有しているものが多い。これを漢字文化圏ということばであらわしている。言語の歴史は文字の歴史よりはるかに古いから、古代の日本語についてもわからないことばかりである。しかし、古代の言語の歴史はともかくとして、文字時代になってからの歴史は朝鮮語も日本語も圧倒的な中国文明の影響を受けて、大きく変容したことは確かである。中国語、朝鮮語、日本語はひとつの言語圏を形成しているといっても過言ではないだろう。

日本という国家が成立したのは律令制の成立から後のことだと考えられる。それ以前の日本は中国系、朝鮮系、さらにはアイヌ系の民族が住む地域であったと考えられる。ことばもさまざまなことばが話されていたと考えられる。律令制国家が成立すると、律令制国家の支配者は、日本人は太古の昔から「やまと民族」が支配し、「大和民族」が支配した地域であるという神話を作り上げた。それが『古事記』であり、『日本書紀』という皇国史観である。しかし、「やまとことば」を分析的にとらえてみると、「やまとことば」は決して純粹でないことがわかる。

人間は誰でも、10代の前半まではどんなに複雑な文法構造をもった言語でも習得できる生得の能力をもって生まれてきている。一つの言語学ぶことができなかつた子供はいない。人間の脳は生まれつき、どんな言語にも対応できる柔軟な構造になっているのである。

私たち大人は、中国語の四声はむずかしくて、とても学習できないよ、とか、朝鮮語は母音の数が多くて区別できないよ、というかもしれない。しかし、中国語に四声があることも知らずに生まれてきた中国人の赤ちゃんは難なく、四声を発音し分けるようになる。l と r のある言語に接すれば直ちにその区別を認知することができる。しかし、残念ながら12歳を過ぎることになると、最初にインプットされた言語のパターンが認識されることになり、第二言語のパターンの習得は、第一言語のパターン認識に邪魔されてできにくくなっていくことが知られている。

赤ん坊は生まれてきて初めて接することばに、単数形と複数形があっても驚きはしない。双数という形が別にあったとしても、自然のこととして受け入れることができる。女性名詞と男性名詞の区別化があっても「当然だ」という態度で受け入れることができる。格変化にもたじろぎはしない。接中辞がある言語に突然出会っても大丈夫である。カ行変格活用とか、ラ行変格活用などがあっても、それがカ行変格活用だとかラ行変格活用だとかいることばを知る前に使うことができる。12歳くらいまで人は、二つ以上の言語を習得できる柔軟な頭脳をもっているということができるようである。乳歯は柔軟であるがもろく、永久歯は堅牢であるが融通がきかないということであろうか。いずれにしても、人類は誰でも自分のことばで愛をささやくこともできるし、空腹をみたすこともできる。また、努力さえすれば、第二の言語や第三の言語も身につけることができる。人間の使うことばは、どんなにむずかしい言語でも、赤ちゃんの頭脳のなかにあらかじめ設定された言語機能の範囲を越えるものではないということができるようではないだろうか。人間の脳の認知能力はすばらしい。

おわり

Thank you! Danke Schön! Merci beaucoup!

謝謝(xie xie!). 감사합니다!(kam sa hap ni da!)

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。ことばは意味を伝えるものである。しかし、文字はことばを模写したものにすぎない。文字が発明される前からことばはあり、原初ことばは音波であったのです。